

新聞を読む若い人はミ－ハーな“情報好き”？

SNSをはじめ様々なニューメディアの台頭によって、“若者が新聞を読まなくなっている”とよく言われています。今回の調査では、M1・F1（男女20～34歳）層の新聞読者の割合は67.6%。M2・F2（男女35～49歳）層の81.6%、M3・F3（男女50歳以上）層の92.9%と比べると、やはり少し見劣りします（図1）。しかし“読んでいることが当たり前”のメディアではなくなったことで、逆に現在の若手新聞読者には、非読者と比較して何か特徴的なプロフィールが現れてはこないでしょうか。ここでは現在新聞を読んでいる若者とはいったいどんな人たちなのか、という点にスポットを当ててみましょう。

まずM1・F1層の新聞読者本人の世帯内での立場を見ると、「世帯主の子ども」の割合が非読者に比べて高くなっています（図2）。また住居形態では持ち家居住の割合が高く、この層は実家などの持ち家で親と同居しているケースが多いと考えられます（図3）。この特徴には、まず働き手が多い分、世帯内収入が高く、かつ食費や水道光熱費などの生活費が抑えられる点、さらに実家住まいであれば住宅ローン等の負担も軽い点など、生活に余裕が生まれるというポジティブ面が考えられます。事実、平均世帯年収、平均金融資産額、1か月の平均小遣い額を比較すると、いずれも新聞読者が非読

読者を大きく上回る結果となっています（図4～6）。これらのことからM1・F1新聞読者層は比較的安定した生活基盤を持った生活者であり、マーケットとしての魅力を備えた層であると考えられます。

次に「情報に関する意識・態度」を見てみると、新聞読者は非読者に比べてほぼ全項目で優位となっていました（図7）。特にスコアに5ポイント以上の差がある項目を見ていくと、「世の中の大まかな動きは大体把握していると思う」「興味あることや仕事に関することで、知らないことがあると気になる」「1つの情報を複数の情報源で確認する」「自分が直接関わりのないことでも知っておきたい」など、幅広い分野の情報を、できるだけ間口を広く取って入手しようという意識が高いことが分かります。この特徴は、新聞読者と非読者で各メディアの利用状況を比較すると、読者の方が多様なメディアに接触している点からもうかがい知ることができます（図8）。

このようにM1・F1世代の新聞読者は同世代の非読者に比べて、情報に対する間口を広く取っているため、自分がもともと興味を持っていなかった分野の情報でも、偶然触れることによって感度良く反応する、いい意味でミ－ハーな“情報好き”の層と言えるのかもしれません。

（毎日新聞東京本社 藤井 淳一）

図1 世代別新聞読状況

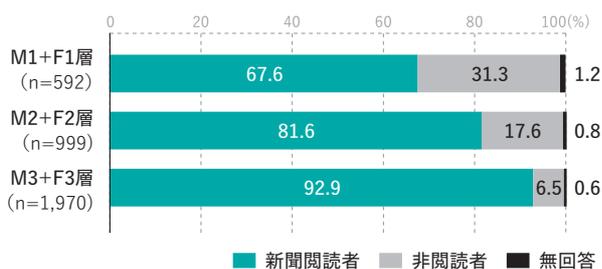


図2 M1・F1層の世帯内での立場

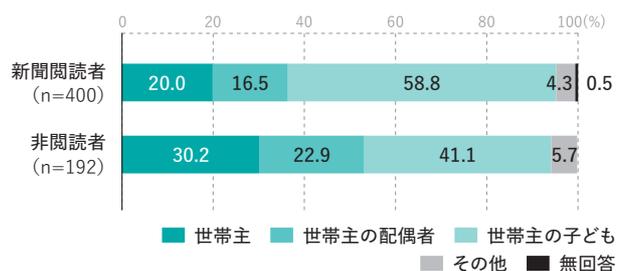


図3 M1・F1層の住居形態

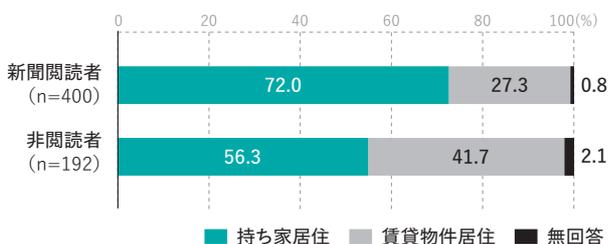


図4 M1・F1層の平均世帯年収

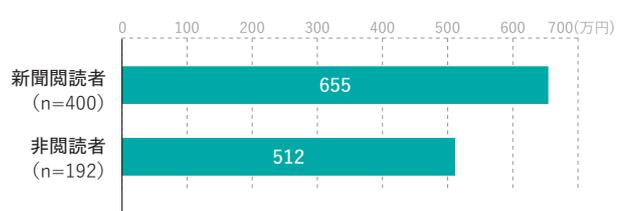


図5 M1・F1層の平均金融資産額



図6 M1・F1層の1か月の平均小遣い額



図7 M1・F1層の情報に関する意識・態度

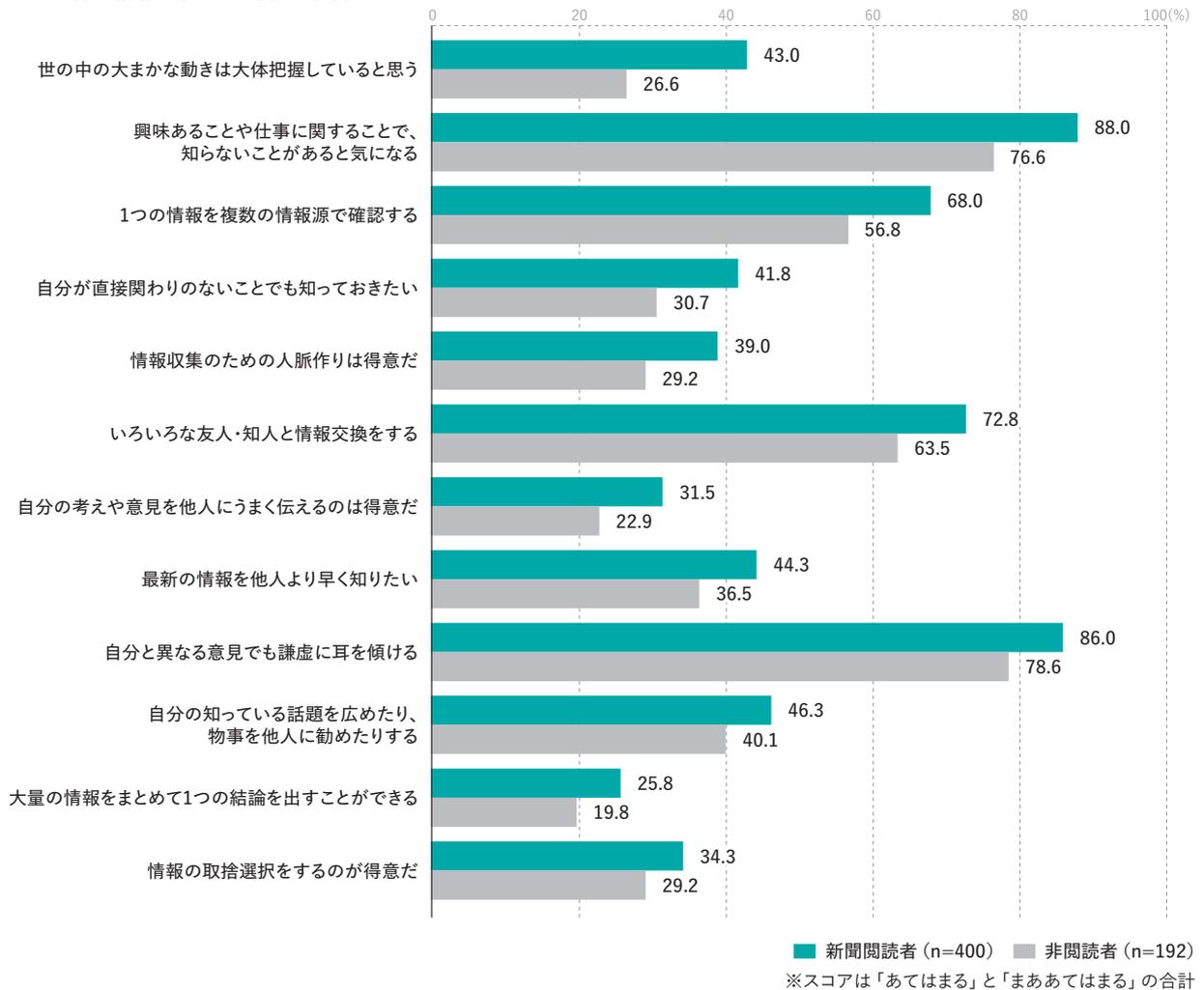


図8 M1・F1層の各メディア利用状況

